

書評論文

一般理論による日本の近代化の説明：

富永健一著『日本の近代化と社会変動』
(講談社学術文庫, 1990年)の貢献*

安 積 仰 也

ひとつの著作を評価する場合、我々には何等かの一般化、標準化された尺度があるであろうか。私の知る限りそうした尺度は明確化されていない。それでも我々は書評を頼まれれば何とかそれをこなし役割を果たしている。往々にして著者自身は何らかの尺度を提供している。例えば本の目的が明記されており評者は本の成果をその目的に照らし合わせて評価することができる。社会学は科学の分野であるが故に研究は科学的方法に従わねばならない。従って科学的方法が評価上の尺度にもなる。然し著作が理論分野にとどまり、いかなる検証の試みも成されない場合、また今日のこのセッションの対象である富永健一の『日本の近代化と社会変動』のように理論の開拓と検証が試されている著作の場合、如何なる物さしで評価を行うのがよいであろうか。この書評セッションへの参加にあたって、私は尺度を明確化すべきと考え、レジメに示されるものを書いた。¹⁾ 然しあとで気がついたことだが、レファリー制度が習慣になっている欧米の学術雑誌には評価用紙なるものがある。この用紙には評価すべき観点が明記してある。評価の為の尺度が標準化されているとは言い難いが、少なくとも評価されるべき観点は明記してある。レファリーはこの用紙を使って論文に点をつけるほか著者のためにコメントを往々にして何頁もタイプして編集長に送る。編集長は複数のレファリーから戻ってきた評価用紙とコメントを読み総合的判断をして、その論文をリジェクトするか、修正後再投稿を勧める

か、そのままアクセプトするかを決め、著者に通知する。評価用紙は著者には送られないが複数のレファリーが書いたコメントは編集長からの手紙と共に著者に送られる。¹²⁾

余談だが私はこうした匿名レファリー制度を学術雑誌の全てで採用することをすすめたい。各大学で出している紀要の類のハウスジャーナルは莫大なる無駄であり、全国の大学で毎年紀要出版に費やされる予算の合計は大きな額になると考える。如何なる評価もなしに出され、しかも誰も読まないハウスジャーナルを出すよりも、一人一食の予算が2円であるとされる東南アジアの難民キャンプに献金する方がずっと人類の貢献になると考える。ハウスジャーナルでなく、門戸を広げレファリー制度をとり入れて評価と競争の要素を学術雑誌がとり入れれば学会の資質も向上すると思われる。

そこで今日は、私がお店で考えついた評価観点のリストを使うよりもアメリカ社会学会の機関誌 *American Sociological Review* (ASR) の評価用紙を使うこととする。過去の実験に基づき、複数の人によって作られたに違いない ASR の評価表の方が信頼がおけると考えるからである。

ASRはレファリーに八つの観点に関して論文を評価するよう依頼する。その八つの観点は次の通りである。

1. 問題の重要性
2. 関心を呼びうる社会学者の範囲
3. 創造性
4. 文献レビューの質（量ではない）
5. 理論的議論の質
6. データの質
7. データ分析の質
8. 文章の解りやすさ

1. 問題の重要性

先ずは問題の重要性。ASRの評価表では5段階になっている評価点のひとつを選ぶことになっている。富永のこの本の中心問題は題に示されるように「日本の近代化と社会変動」であるが、その中で扱われている問題は多岐にわたる。私の見るところこの本の中心的問題は「如何にして日本の近代化を一般理論で説明するか」である。それに関連して、例えば西洋の近代化と後発社会の近代化をどう扱うか、社会変動と価値変動をどう関連づけるか、西洋のまた日本の場合の近代化（富永に言わせれば歴史的概念としての近代化）をどのようにして普遍的概念としての近代化に考え直すか等々、数多くある。日本の近代化を一般理論で説明するという事は、全ての後発社会の近代化を説明する一般理論を作ることにもなる。

ここまで考えるだけで、最初の項目、問題の重要性については、この本に最高点をつけざるを得ない。

2. 関心と呼びうる社会学者の範囲

これは我々にとっては重要な項目ではない。学術書の価値は、どれ程広範囲の学者の関心の的になるかということとは関係がない。ASRの編集者にとっては大切かもしれないが、我々には大切ではない。とは言え、この項目でも私はこの本に最高点をつける。近代化と社会変動の問題は社会学にとって大切である。1980年代に研究対象としての近代化はポピュラリティの度合が下がった。少なくとも、欧米の社会学者の間では下がった。然し第三世界に住む社会学者の間では差し迫った現実問題として最高の関心の的となっている。ところでこの本には近代化と社会変動という言葉の上に「日本の」がついている。80年代は世界の社会科学者の中で日本への関心が異常に高まった時代である。日本の経済発展と、それともなう世界秩序の中での相対的勢力の向上は、現実世界において関心の的とならざるを得ない状態となった。その意味でもこの本は広範囲の社会学者の関心の的となるものと考えられる。

3. 創造性

はっきり言えば「何か新しいものが入っているのか」という質問である。入っている。明らかに多くの新しいものが入っている。特に目新しいものをいくつか挙げてみよう。前に挙げたことにも関連しているが、ひとつは特に日本でよくみられる日本を特別視する見地を全て否定し、一般理論を構築して日本の近代化と社会変動を説明しようとした構えが新しい。第二に先発した西洋と非西洋後発社会の区分、即ち近代化の条件は西洋と非西洋後発社会とでは全く異なっているという主張、またそれらの条件の明確化（即ち近代的価値の伝播可能性、近代的価値を受け入れる動機づけ、そして近代的価値の受け入れにともなって引き起こされるコンフリクトの度合いを指摘したこと）。第三にその検証作業を一応やってのけたこと。この創造性の側面でも私はこの本に最高点をつける。

4. 文献レビューの質

引用文献ののっている約200冊の文献をみていると重要文献と思われるものが網羅されており、私が気がついて入っていないものは Theda Skocpol の *States and Social Revolutions* ぐらいである。ここでも最高点をあげざるを得ない。

5. 理論的議論の質

この側面を評価するのは難しい。何しろ余にも理論的議論の数が多いからである。それにも増して、議論の質を測る尺度には明確化されたものが存在しないからである。

この本の議論の中心は先の3.創造性のところで挙げた二点、即ち後発社会の近代化は先発社会の伝播より起こり、発展への条件は先発社会のものとは異なるという議論の外に、経済、政治、社会、文化の四つのサブシステムのうち近代化が起こり易い順序は経済、政治、社会と文化であり、先発社会と順序が逆になっていると主張され、さらに各サブシステムの代表

的過程は経済では「産業化」、政治では「民主化」、社会では「自由、平等の実現」、文化では「合理主義の実現」ととらえることができるという二つの議論がある。更に近代化の条件として伝播可能性 (diffusibility)、動機づけとコンフリクトの度合いという三変数を指定した議論は、この側面における評価の対象となろう。

この議論の質は高いか、低い。何を尺度として判断を下せばよいのであろうか。この場合、数多い過去の文献を尺度とせざるを得ない。日本の近代化を焦点とする過去の著作のうちこの富永の本と一番類似しているのはロバート・ベラーの *Tokugawa Religion* (邦題『日本近代化と宗教倫理 — 日本近世宗教論 —』) である。特に理論の基礎にパーソンズの AGIL スキームを持っている点でこれら二つの本は同類である。

これら二つの本を比べる場合、明らかに富永の方が過去の理論の整理整頓、主要変数の指摘と明確化、またわかりやすさにおいてすぐれている。だからこの理論的議論の質の側面でも私はこの本に最高点をつける。

6. データの質

富永は理論を日本をケーススタディとして検証しようとしている。日本の歴史をさかのぼり数々の歴史的文献を使って検証の作業をすすめている。現代の社会に関しては政府機関の調査結果や彼自身参加した社会移動調査の結果等も使っている。この中の歴史的データの質に関しては私自身の知識の欠如から、判断することはさけない。然しより近代の資料に関しては全く問題はないと思う。従ってこの側面においても私はこの著作に高い成績をつける。

7. データ分析の質

私の気がつく限り富永の姿勢は一貫して客観的観察者の姿勢であり、理論にあうデータを求めるとか、解釈をするという様な気配は見られない。この面でも問題はない。

8. 文章の解り易さ

最後の側面は文章の解り易さであるが、ここでも私は最高点をあげたい。理論と頭がすっきりしていて、何を言いたいかをはっきりしていると、おのずと明解な文章が書けるのであろうか。この本は富永によるパーソンズの邦訳書よりずっと読み易い。

ここで *American Sociological Review* が使っている八つの観点においての評価を終えた。総合的に見てみると私はどうやらこの本に満点をつけてしまったようだ。それではこの本は非の打ちようのない完璧な本なのであろうか。この世にそんなものはありえない。我々にはそんなものは書けないし、完璧なものなど書いてはいけない。

ではこの本の何処が問題となるのか。いくつもあろうが私は特に次の二つを指摘したい。

ひとつは基本的な理論が未だにパーソンズの社会進化論から脱却していないことである。従って産業化にともない、民主化、平等化、合理化が追求されるというこの図式には脱産業化、Post-industrialism、また逆の後進化を説明する余地がない。ベラーの *Tokugawa Religion* が出版された1950年代にはアメリカ社会を先頭に全ての社会が同一方向に向かって進化しているという議論には一応の妥当性が実感されていた。そんな実感は今はない。ベラーはあの本を出したことを後悔していると私は思う。過去30年アメリカ社会は当時の誰もが期待した、より豊かな、より民主的な、より自由で平等で、合理的な社会へと進展してはいけなかった。その間、日本はどんどん経済発展し日米間の差は縮まった。進化論を信奉する人はもういない。

直接に関連しているが、富永理論のもうひとつの問題は彼の言うサブ・システム間の関係である。パーソンズの理論では四つのサブ・システムは相互に関連しており、その間に不均衡状態が起これば全体が均衡に向けて動くようになっている。問題はどの程度の不均衡が可能なのか、また均衡

回復にどれ程の時間がかかるのかということだ。この理論では不均衡は社会的緊張を起こすことになっている。サブ・システム間の不均衡はどの程度まで許容されるのであろうか。日本の場合、経済は確かに発展した。日本は豊かな国となった。然し、現在の日本の政治的貧困はこの理論では説明できない。どうして経済と政治の間にかくもひどい不均衡が可能なのだろうか。富永は現在の日本にはプリモダン、モダン、ポストモダンの三重構造があると言う。また第二次世界大戦に至るまでの日本社会ではサブ・システム間の不均衡からくる社会的緊張感が高まったが、「対外戦争を起こすことによって関心を外に向け緊張から目をそらせた」(p.416)とある。それでは今の日本では理論上あるに違いない緊張感は何処でどう見られ、またどう処理されているのだろうか。

結論を急ごう。日本特殊論が幅をきかず日本で、富永が一般理論で日本の近代化を説明する本を書いたことを私は高く評価する。そしてこの本が若し20年前に英文で書かれていたら、さぞや高い評価を受けたであろうと思う。今でも、若しこの本の英訳が出版されたなら、高い評価をする人も多かろう。非西洋人を自負する日本人の社会学者が西洋の社会学者のゲマインシャフト・ゲゼルシャフトは概念ではなく単に西洋で起こったことの描写にすぎないと極付け、数多くの社会学の文献を網羅して理論の整理整頓をし、新しい近代化理論を作り、それを日本をケース・スタディとして検証しているこの本は、欧米の社会学者にも良い刺激を与えるものとなるであろう。日本のことをよく知らなかった人、また日本研究に関する諸文献を知らない人にとっては使われているデータは新鮮に見えるであろう。然し一番大事な背後の理論はもう古いと彼らも考えるであろうと私は思う。

* この書評は1992年10月31日に九州大学で催された第65回日本社会学会大会の「書評セッション」で発表されたものである。

註

- (1) 報告要旨にあるレジメは次の通りである。

日本社会学会大会の書評セッションに参加して富永健一の新著『日本の近代化と社会変動』を論ずるにあたり、先ず私が何故にこの本を高く評価するかを説明したい。

評価の尺度となっているいくつかの問題点は次の通りである。

- ① 一般理論の構築があるかないか。
- ② 一般理論に使われている概念は一般変数かそれとも非変数か。
- ③ 基本的姿勢は理論志向か現象（データ）志向か。
- ④ 現象描写は背後にある理論に基づく選択か、それとも明確化されていない基準による選択か。
- ⑤ 理論検証の論理は妥当か、無理があるか。
- ⑥ 研究方法が明確化されており、他人(読者)によるレプリケーション(replication)が可能か。

これら六つの尺度を使って富永のこの本を評価してみると、非常に高い成績をつけざるを得ない。

日本の近代化に関しては過去いくつかの説明が試みられてきた。だが上記の尺度に照らしあわせた場合、高い成績がつけられるものは少ない。日本を単にひとつのケースとは見ずに、日本を特別視し、日本だけに焦点をおき、一般概念にはなり得ない固有名詞を使い、他の社会には使えない枠組みの中での説明はとても社会科学とは言えないが、そうした議論が幅をきかせている。日本特殊論は社会学であり得ない。日本特殊論と誠に対照的な説明を試みたのが富永のこの本である。

- (2) refereeの仕事は勿論無料サービスである。頼まれればそれを名誉かつ professional responsibility と考え、誰でも喜んでする。年に一度雑誌は referee をした人のリストをのせるが、そのリストに自分の名前を見出すことが唯一の目に見える“報酬”である。日本の学術雑誌では原稿料を支払うところがある。欧米の社会学の学術雑誌はそんなことはしない。それどころか、ASRの場合投稿をする時に processing fee として15\$の手数料を払わねばならない。ASR 編集長 Gerald Marwell 教授からの1992年11月25日付通信によると、1991年の資料では、ASR に掲載される論文の数は投稿される論文の数の13%だった。